海老食い猫縁起

幕末…というにはまだ少し早い徳川時代の末ごろ、江戸に住む侍の家に二十年も飼われている猫がいました。ある年の瀬のこと、例年のごとく鏡餅を飾ると、その老猫がぴたりと床の間の前に座り、餅の上に載せられた伊勢海老をじっと見つめたまま、動きません。

現代では、鏡餅の上には蜜柑を載せるのが一般的ですが、江戸の武家は、鏡餅のうえにはもっぱら伊勢海老を載せた…と、これは、その家に伝わる口承ですから、本当に江戸の、すべての侍の家がそうであったのかは解りません。

歴史的に考証するなら、蜜柑を飾るのは「子種を宿す」という縁起かつぎで、それより古くは橙が用いられたといいます。こちらは、「御家代々ご繁盛」という洒落。語呂の良い橙は、まことに目出たい柑橘類ですが、武家においては禁忌とされることもありました。

橙は、見てくれは大層立派ですが、果肉は貧弱で、酸もきつく、食用に適しません。ゆえに、格好だけは莫迦に立派で、ものの役に立たない武士のことを「橙武者」と呼ぶ風習が、これは戦国時代にあったそうです。

大坂冬の陣の際、こっそり陣を抜け出して遊郭に通っている間に、守備を任された博労ヶ淵砦を敵に攻め落とされてしまった薄田隼人正という武将……嘘か本当かは解りませんが、彼の前半生は、狒々退治で有名な豪傑岩見重太郎であったといいます。その鳴り物入りのヒーローが、遊郭通いでとんだ恥をかいたわけで、彼などはまさに橙武者の典型といわれました。そんなこともあって一部の武家には、橙を嫌い、代わりに伊勢海老を飾る風習ができたのかもしれません。

ともかく、二十年も飼っている老猫は、床の間の前をじっと動きません。やがて大つごもりの夜が来、明けて元旦となっても動きません。

まだ、松が取れないうちのこと。矢張、床の間の前をじっと動かないその猫に、当主が、屠蘇にでも酔っていたのか何気なく――「いったい何が欲しいのだ？」と問いかけました。

すると猫は、すうっとこちらへ顔を向け、

「いせ〜えび」と、答えたというのです。

「化けたッ！」と、屋敷内は大騒ぎ。当時、化け猫は家に災いを齎すと信じられていました。当主は、床の間から海老を取ると庭へ投げ、「この伊勢海老は呉れてやるゆえ、我が家に仇はなすまいぞ！」と、叫びました。

すると猫はまた、すうっとこちらへ顔を向けたかと思うと、「うん」と頷いて庭へ降り、海老を咥えて出ていったまま、二度と帰ってこなかったそうです。

以来、この家には「猫は化けるから、飼ってはいけない」という家訓ができ、その後二百年、猫を飼っていません。

猫絵の作者は、この侍の家の子孫にあたります。

自分の家が猫を飼わなくなった顛末を知人に語り、その時たまたま近くにあったコピー用紙に、持っていた筆ペンで海老を咥えた猫の絵を描いて見せたのが絵を描くきっかけ。

「可愛いですね、もらってもいいですか？」と、その絵を持っていった知人が、しばらくして電話をかけてきました。
「あの猫の絵。何枚か描いてくれませんか？」
何の気なしに、仕事机のパソコンの脇に貼っておいたら、妙に段取り良く仕事が片付くようになったというのです。おや？と思って、転職を考えている友人にその絵を与えたら、給料を今の二倍くれるという願ってもない転職先が見つかったとか。
「親戚に高校受験を控えた子供がいる。宝くじを買った。猫好きの知り合いにやる。俺も転職したい――ともかく、五、六枚描いてくれ」…と。
偶然にしても、面白いこと。五枚描くのも、十枚描くのも一緒と、三十枚ほど描いて、知り合いに配ってみたところ、次々と「効果」が報告されはじめました。
ある食品雑誌の編集者は、この猫絵を手に入れた翌日、病欠した同僚の代理で出張した取材先で、思いがけずロマネ・コンティを振舞われる幸運に恵まれました。
本屋で立ち読みをしていたら、イケメン男子からナンパされた、という四十代の女性。
猫の絵を飾ったその日、店の売上げ記録が出たという居酒屋。
「彼氏ができた」「よりが戻った」「少額の宝くじが当った」「お通じがあった」「血糖値が下がった」「網棚の上に忘れた鞄が無事に戻ってきた」…いずれも、所詮は猫が咥えてくる程度の、小さな幸せばかりですが……。
実際のところ、そんな「小さな良いこと」は日常にいくらでも転がっていて、あるいはこの絵が無くても、屡々遭遇しているのでしょう。
しかし、「日常にいくらでも転がっている」ことなるがゆえに、惰性に溺れ、それを「幸せ」とはカウントしなくなっている――ということも多々あること。もし、この猫絵に効力があるとするなら、それは、日常に埋没してしまいがちな「小さな良い事」を、「猫が運んできた幸せ」として認識することに他ならないのではないでしょうか？
猫絵を身近に置くことで、幸せの感知能力が高まり、ささやかな幸せを喜べるほどに豊かな情緒が育まれるとすれば、それはそれで、化け猫も、迷信も、妖怪も、多少の存在価値を持つのかもしれません。

なお、この絵は手描きですから、一枚いちまい微妙に姿かたちが異なっています。
その顔の猫がお手元に届いたことを「縁」と思って、可愛がっていただければ幸いです。

作者